

◎中世山城調査(縄張り図作成)が開始される！

先月31日(土)に下ノ加江・市野々地区に所在する「市野々城跡」の調査を市史編集委員・松田直則氏(高知県立埋蔵文化財センター所長)により実施された。

これを皮切りに今月14日(土)に「長野城跡」(下ノ加江・長野地区所在)、15日(日)布城跡(布・郷地区所在)、16日(月)小方城跡(下ノ加江・小方地区所在)の調査を行った。この調査では、松田氏のほかに、山田高等学校教諭・尾崎召二郎氏(地歴公民科)を調査協力員として委嘱し、松田委員と協力して調査を進めた。尾崎氏は、松田委員とともに『土佐の山城—山城50選と発掘された23城跡—』(ハーベスト出版)の執筆者の一人であり、山城についての専門性を有する高校の社会科専門教員である。

今月実施した一連の調査では、前述の2人の他に、市史編集委員・武藤清氏、元生涯学習課長橋本清郎氏に同行協力と地理案内をいただいた。また、14日(土)の長野城跡での調査では、高知新聞土佐清水支局長・山崎彩加氏が取材のため同行した。

これらの調査で分かったことは、『高知県遺跡地図』(高知県教育委員会)の29-246の「塩屋谷城跡」は誤りで実は「長野城跡」であることが判明した。塩屋谷とは実際もう少し南側の旧下ノ加江中学校側にある谷であり、29-246城跡の所在地は長野地区である。また、『土佐清水市史・上巻』の城跡図では「長野城跡」と記載されている。

これについては、詳細な調査が終わり次第、県教育委員会と当教育委員会で協議し、包蔵地カードの訂正を図っていきたい。

16日(月)の小方城跡の調査では、小方地区に所在する圓通院(薬師堂)の上の山道を登った。途中、旧愛宕神社の社が残っていた。ご神体自体は別の場所に移設されている。愛宕神は、火防を司る神である。近世を通じて度々火災が生じ、当時の地名「下茅」の「茅」の字を避け、「下ノ加江」に改称されたと『土佐清水市史・上巻』には記されている。



小方城跡本丸部分の測量調査



小方城跡に上がる途中にある旧愛宕神社

「市史執筆のブレイクタイム(12)」 大漁バラ抜き節

市史編集委員長 田村 公利

大漁バラ抜き節は、昭和 36 年 11 月 13 日に土佐清水市指定文化財（無形・芸能関係）に登録されている。カツオ節加工の歴史は古く、近世以前からあったが、本格的にカツオ節加工が鼻前七浦で始動したのは、近世前期に紀州国印南浦海民がここに進出して以降のことである。

近世中期から中浜を本拠に山城屋が隆盛を極める。山城屋一族は本家・分家がそれぞれカツオ船と納屋を所有し、船頭・船子・納屋番師・バラ抜き女子などを従えて節加工に励んだ。近代に入り、大正から昭和の初めにかけて和船から動力船に転換されると山城屋の全盛にも陰りがみえた。県東部方面からも大浜などに出張りが置かれ、地先でカツオを待つカツオ漁から、五島列島やトカラ群島、伊豆諸島、房総沖、三陸地方などにカツオを追い求める遠洋漁業にその形態が変わってきた。

カツオ船・納屋の親方主人は、出漁先の鹿児島県山川や長崎県福江島に納屋を借りた。そこで地元の中浜浦や大浜浦の人々を納屋番師やバラ抜き女子として雇用した。大型カツオ船に船頭や船子とともに乗せ、出漁先でカツオ節加工を行わせたのである。船頭・船子・納屋番師・バラ抜き女子は、それぞれの役割こそ違え、

いわば流通販売において欠くことができない、いわばワンセットの生産における動線であった。バラ抜き作業は、浦の女性の唯一の賃金労働であり、4月・5月の最盛期には、夕方カツオ船から降ろされた大量のカツオを納屋番師が分業で下処理し、煮る。その後、バラ抜き女子によって骨抜きが行われる。手早く中骨 7~8 本、腹骨 20 本ほどを抜いていく。

黙々とバラ抜きしては作業能率が上がらない。そこでバラ抜き節が唄われた。納屋は近接しており、納屋ごとに張り合いながらバラ抜き節を唄う。この唄が浦全体に響き、活気づく。節づくりがせわしくなるとバラ抜き女子は、兄姉である子どもに弟妹の赤ん坊を背負わせた。兄姉は学校に赤ん坊を背負って通った。下校すると、母の働く節納屋に授乳のため赤ん坊を連れて行った。浦の節納屋にはバラ抜き女子の赤ん坊に乳を与える光景があちこちでみられたという。

バラ抜き節は、鼻前に生きた浦女性の魂の唄であり、生活の中に根ざす心の発露でもある。



土佐野灘辺を急げよ鯉
沖の鱈は野山を照らす
土佐の目は鰯の目
沖の鱈は野山を照らす
沖の鱈は野山を照らす
沖の鱈は野山を照らす
沖の鱈は野山を照らす
沖の鱈は野山を照らす
沖の鱈は野山を照らす
沖の鱈は野山を照らす

山下 賢

令和 2 年度・土佐清水市婦人大会で少年時代の万次郎について講話



今月 9 日、中央公民館 3 階多目的ホールにて「少年万次郎が過ごした中浜浦」との演題で市史編さん室（室長・田村）が約 1 時間 30 分講話を行った。

明治 8 年に万次郎と長男東一郎が中浜に帰省した『中濱東一郎日記』の「土佐紀行」の日記文を引用しつつ、母「志ヲ」にスポットを当て講話を進めた。東一郎は、当時の中浜浦の女性が家の内外で細目に働く姿を目の当たりにしてその働きぶりを高く評価している。